

水無みよう

第19号

夏は多くの人が川に親しむ季節。魚捕りを通して長い間、川を見てきた、魚沼漁協石田東分会長（山崎）と上村同副会長（黒土新田）の両氏から「川」をテーマに寄稿してもらった。

水無川は地域の財産

魚沼漁協東分会長 石田 良雄（54=山崎）

魚、保護と増殖続けて

私は魚沼漁協組合員の東地区の代表をしています。私達組合員は川で漁する資格を県より許可を頂いていますが、川は海と違い非常に狭く当然漁業資源も限られています。少ない資源で県から許可の条件として、資源の保護と増殖が義務付けられています。

要するに「魚は捕って良いが、減らないように稚魚放流もやりなさい」ってことです。県からは毎年魚種別に何尾以上と指示が出ます。これを守り、私達魚沼漁協は半世紀以上も川と付き合ってきました。昔は確かに生活の糧になったと聞いています、川漁師と言われる人達も普通に居たそうです。今現在川漁師と呼べる人は漁協全員でも私の知る限り一人だけです。

悲しいかな、現在川漁師をやって生活の糧にするのは至難の業です、正直無理です。私達が頑張って漁をしても魚が捕れなくなっているのが実状です。つい最近、竿を手に漁に出たが一匹も釣れなかつたと嘆いている組合員と話す機会がありました、この方は私より一回り以上先輩で笑った顔がきれいでとても印象的（右上へ）

東地区地域づくり協議会々報
発行 平成28年7月15日
発行責任者 佐藤成孝
茗荷沢268番地1（東開発センター）
電話 025-779-3312

な人です、この先輩が言うんです（昔は良かった）と、話を聞いて悲しい気持ちになりました。

漁協組合費で2河川に放流

私達漁協東分会では毎年河川（水無川、三用川）にイワナとヤマメの稚魚を約二万五千尾放流しています。私達



川も、高田上流や雷土新田地内に放流した。
魚沼漁協から配布されたヤマメを放流する漁協大和
支部会員。（7月11日、水無川・金山橋）この日三用

は組合費を漁協本部に納め、本部はその資金で稚魚を生産して、私達に渡し、これを前記河川に放流しています。

このサイクルを五十年以上続けています、ときには稚魚を背負って奥地まで入ることもあります、それでも魚は思うように増えてくれません。東地区的組合員数は約七十名、組合費は一人一万円、これを毎年続けてきました。

じつは組合員の中には全く漁をしたことの無い方や、高齢のため漁に出られない方、休漁中の方が大

勢おられます。その方達は漁もしないのに高い組合費を払っている理由を知っていますか？

私の考えですが、ただ魚が好きだけなんだと思います。捕るもの好き食べるのも好き、ただそこに泳いでいるのを見てるだけでも好きなんです。でもこの好きと言う感情は非常に大事なことではないでしょうか、皆さんなぜここに住んでいるんですか？ここが好きだからですよね。夏は暑いし冬は豪雪、でもここから離れない。不便でもこの土地に魅力があるからではないでしょうか。自然の魅力と言っても良いと思います。

三用川は集落内の整備が進み残念ながら昔の面影はありません、けれど水無川はまだ自然が残っていると思います。

水無川、水無渓谷は東地域の大きな財産だと思います。魚がない河川は自然な河川ではありません、それは水路です。

自分達を強く引き留めている土地の魅力は自然の魅力です。

八海山ばかりでなく、水無川にもぜひ目を向けてください。

水無みよう、こよみ、パッション

当協議会広報部（関正太郎部長）はこの会報「水無みよう」に加え新たに「こよみ」「パッション」を発信し三部にします。

水無みよう 担当 関正太郎（高田）

年3回の発行 一協議会の全体や地区的課題など広く。配布は東地区全世帯と行政・関係機関

こよみ 担当 上村則夫（大倉）

発行は随時 協議会の動きや地域の行事・話題・課題。配布は一協議会役員、行政・関係機関。

パッション 担当 小幡富夫（芋赤）

ブログ。更新は随時。地域や行政の動きを地域・日本・外国に伝える（知人に教え多くの人から「お気に入り」に登録してもらいたい）

【ブログアクセス先】

<http://higashi333.exblog.jp/>

または

大和エリア 東地区地域づくり協議会

組合員・遊漁者の減少

組合存続に危機感

厳しい漁協の実態

川を肌で知っているのは、漁をする人達だ。河川環境について漁協の同意を必要とする場面も多くある。

漁協が弱体化すれば河川環境監視も弱まる。魚沼漁協（皆川雄一組合長）は組合の現状を「組合存続の危機」と報告している。

合員数、鮭鱒特別採捕者数は、約20年にわたり減少している」とした

▽組合員の減少
平成27年度中に、脱会（組合員資格喪失）は168人。新会員36人で実質132人減少。同年末の組合員数は2861人になつた。

▽厳しい経営

うえで「この状況を抜本的に改善することは難しい」と述べている。さらに減少の原因について「レジャーの多様化、少子高齢化、人の川離れ、食習慣・伝統食の変化等枚挙にいとまがありません」としている。

改善することは難しい」と述べている。さらに減少の原因について「レジャーの多様化、少子高齢化、人の川離れ、食習慣・伝統食の変化等枚挙にいとまがありません」としている。

平成27年度収支は大幅な赤字になりそのため放流基金引き当て金550万円を取り崩した。今後の方向を「財政健全化検討委員会」で検討している。

JK

こうしたなか一漁協は▽カワウや外来魚対策▽水の郷工業団地排水検討委員会参加▽大河津分水拡幅に伴う魚道改修協議▽東電湯沢発電所取水ダムにかかる魚道協議などしてきた。（総代会資料から）

ささやかかもしれないが魚目線で一漁協東分会は昨年度、大倉橋架け替えに伴い県と事前協議した。

9月18日（日）、堂島地内のふれあい広場で「第5回水無川ふれあい祭り」が催される。水無川

大和支部と共に対応、ささやかかもしれないが、魚の視点で河床構造を提言した。県も良く話を聞いてくれ提言を取り入れ、現在工事が進められている。

川の催し あれこれ

強会があつた。「八海山麓水無溪谷研究会」井口寛会長主催。行政関係や地元関係者ら大勢が参加。上流を視察後、サイクリングターミナルで意見交換した。

あゆ漁始まる。

7月10日解禁

今年もあゆ漁が始まった。野積海産・魚沼漁協・山形県海産・天竜川養魚場・海産あゆなど、1,100,500尾のあゆが放流されている。



写真II 水無橋から上流を望む。この写真左手前には昭和40年頃「ゲンジ淵」という大きな岩と淵があり、中学生が危険を乐しみながら夏、泳いだ。

少は残っていて大倉頭首工の前後は、まだまだ釣り場に適した環境が残っていたと思います。

しかし年々川底が土砂で埋まり、淵が無くなり、次第に魚の姿も薄くなって、水無川に足が向かなくなり釣れる他の川に通う様になってしまいました。

魚が居なくなると、釣り人も訪れなくなるのは当然の事だと思います。

地域住人の安心安全を考えた必要な工事の数々なのでしょうが、最低限川底の自然だけは残しておいて頂きたかったと思うのは、釣り人のエゴなのでしょうか？

毎年漁協が山女魚、岩魚の稚魚放流をしていますが、中々成果が出ない状態です。川に魚が住んでいることが当たり前だと思うのですが、増えるどころか減る一方です。水無川に放流を続けても育つ環境が無くなってしまったと私は思います。水が流れているだけでは、溪流魚は生息出来ません。

先日、ある方が昔は淵に潜れば魚が沢山泳いでいて水族館の様だったとおっしゃっていました。

水無渓谷に岩魚が悠遊と泳ぐ昔の流れが懐

かしい思い出となってしまった事は事実です

現在私の釣りは、鮎の友釣りと海釣りだけで、渓流釣りは殆どしていません。

自然豊かな川はある

北海道の西別川、忠類川、秋田県阿仁川等まだ自然豊かな川は存在します、自然豊かだったこの地に住みながら、憧れの川を探している自分を虚しく思います。

移住のきっかけも

今から35年前、中学生まで私は東京で暮らしていました。小学三年生になると毎年夏休みは父の実家にお世話になり憧れの川遊び三昧でした。三用川でのカジカ突きそして水無川の釣り大会、特にその時見た水無川の景色は東京暮らしの私には衝撃的でした。東京では味わえない自然の中での川遊びは私の小学生時代の最高の思い出です。

当時昭和40年代後半は空前の釣りブームと釣りを題材にした漫画「釣りキチ三平」ブームで、渓流釣りをしたという事だけで、同級生の釣り仲間に羨ましがられてチョット鼻が高かった記憶があります。

移住のきっかけも

昭和56年に黒土新田に移住する事になり私の釣り人生が充実して行くのですが、私の中で移住のきっかけになったのは水無川の近くに住める事が最大の理由でした。しかし昭和60年位になると水無川の景色が変わり始め、釣りキチ三平に描かれていた様な私の憧れた渓谷の姿は無くなり用水路の様に両岸を固められていきました。

20年前までは、週末は釣り人で混み合って、自分の思う場所に入れなかった事もよくありました。

護岸で固められても、川底は自然の姿が多